

# 進化経済学会ニューズレター No. 15

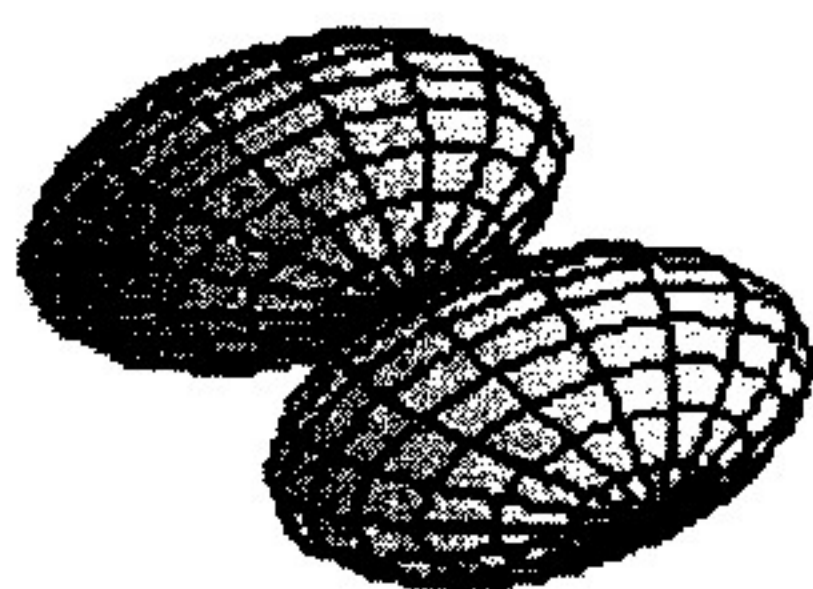
January 2004

進化経済学会事務局

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 3 の 8 の 8

国際文献印刷社内 進化経済学会事務局

T:03-5389-6493 E:evoeco-post@bunken.co.jp



\*\*\*\*\*記事\*\*\*\*\*

オータムコンファレンス・サマリーズ

第 III 期第 2 回理事会報告

平成 14 年度決算

学会参加記

ブシノでの進化経済学会議

ヨーロッパの進化経済学と技術革新論:

EAEPE 年次大会と SPRU コンファレンスに参加して

関連学会・研究会案内

WEHIA04

第 8 回福井大会「市場と政府の共進化」プログラム

名簿訂正/大会・学会事務局から

\*\*\*\*\*

## オータムコンファレンス・サマリーズ

福井（福井県立大学）大会事務局長  
進化経済学会事務局理事 服部茂幸

今年のオータムコンファレンスは「地域と政府の共進化」というテーマにて福井県立大学で開催された。例年、コンファレンスは9月の開催であるが、今年度は開催校の都合により、11月となった。また福井県立大学には福井県下の産業、行政、大学、市民などの学術交流を促進するために地域公共政策学会が設けられている。そこで、今年度のオータムコンファレンスはこの地域公共政策学会との共催とした。なお、この概要は大会実行委員長が執筆すべきであるかもしれないが、今年は岡敏弘が報告者の1人なので、代わりに事務局長の私が執筆する。

今年度のコンファレンスの出席者は75人であった。うち進化経済学会の会員は44人である。

初めに私の司会のもとで4人の報告者が報告した。その後の討論の時間では瀬地山敏氏（鹿児島国際大学）に司会を交代し、フロアーからの質問を受けた。当初、報告者の間で討議を深めるつもりであったが、私の不手際もあり、報告時間が予定をオーバーし、その後の討論の時間がとれなかったのが反省点の1つである。

報告要旨を見れば分かるであろうが、単純な市場と政府の2分法が成り立たないことを今回の報告のそれぞれは明らかにしている。コンファレンスの開催にあたり、立地条件が悪いことも考慮して、学会参加者を増やすためにできるだけ広い範囲がカバーできるようにした。しかし、終わってみ

ると個別の論点について議論を深めるために、もう少し各論に絞った方がよかったのではなかったかという気もしないでもない。司会の瀬地山先生も同様の感想を述べておられた。この点は次年度以降のコンファレンス開催に際してよく考慮していただきたい。

来春の進化経済学会本大会ではこの「市場と政府の共進化」の各論として福井県を中心として、地域の経済活性化に関するシンポジウム「福井県の産業の現状と未来」を開催する予定である。

以下に4人の報告者の報告要旨を掲載する。

### ネットワーク産業の競争と規制の共進化ーボトルネック独占性とネットワーク外部性

京都大学 依田高典

技術革新と規制改革の結果、情報通信・エネルギー・交通運輸のようなネットワーク産業は一国の経済成長に大きな影響を及ぼすようになった。米国や英国他の先進諸国では、こぞって、ネットワーク産業の規制改革を進めている。日本に関していえば、ペースは遅かったものの、ようやく各ネットワーク産業の規制改革は定着してきた。なぜネットワーク産業の規制改革には特別の配慮が必要なのだろうか。ネットワーク産業には二つの柱がある。第一の柱は、ボトルネック独占性と呼ばれるものである。ネットワーク産業では、電話の地域通信

網・電力の送配電網・ガスのパイプライン・鉄道のように大規模な投資を必要とするネットワーク・インフラを用いて、顧客にサービスを提供している。そこで、競争の頸木になるネットワーク設備「ボトルネック独占性」をすべての事業者に開放し、競争を促進し、より低廉な料金で、より多様なサービスを消費者に提供できるような規制改革が重要な政策課題になっている。第二の柱は、ネットワーク外部性と呼ばれるものである。ネットワーク産業には、消費者の効用が自ら消費するサービスそれ自体のみならず、同様のサービスを消費する消費者集団の規模に依存するという性質がある。ネットワーク外部性が十分に作用するには、個々のネットワークが相互接続され、ネットワークのネットワークが形成されることが必要である。ここでいうボトルネック独占性は供給側の規模の経済性であり、ネットワーク外部性は需要側の規模の経済性である。規模の経済性が存在するシステムではいわゆるポジティブ・フィードバックが働き、初期値に応じて異なった振る舞いを示す。その場合、必ずしも効率的でない技術が普及したり、非効率的な技術がいつまでも居座り続け、社会的効率性を妨げることが起こる。また、システムが非線形なので、パラメータを変化させたときの影響が極めて不確定になり、産業政策の効果が予測不可能になるという問題も起きる。つまり、ネットワーク産業は複雑系なのである。

### 環境規制と市場メカニズム

福井県立大学 岡敏弘

新古典派経済学は環境問題を外部負経済の問題として捉える。アローの整理による

と、外部負経済は、市場の不在という問題の一部だから、この捉え方から出てくる当然の処方箋は市場を創設してやればよいというものになる。市場の創設にはいくつかの手段が考えられるが、そのうち、課税によって外部負経済を内部化するという手法は、ピグー以来の伝統的な考え方であり、現在の環境経済学の中心的命題でもある。アローの整理自体、効率性の観点から環境問題を見ているのであるが、市場創設という解をとらない場合、つまり規制という政策手法を対象とする場合でも、環境経済学は、費用便益分析によって最適な規制の水準を見つけるというように、これを効率性の観点から見るのである。

本報告では、環境政策の現実が、こうした新古典派環境経済学の枠組の限界を示していることを明らかにした。第1に、現実の環境税は、それに固有の弱点、すなわち、環境負荷の排出者にとっての税負担が大きくなりすぎるという欠点を克服しようとして、軽減税率を導入し、それでは環境負荷の低減効果が小さくなるので、結局は規制に帰着する。第2に、市場創設の手法である排出権取引制度は、総量規制を前提にした規制的手法であり、初期の権利配分の困難の故に総量規制が実施困難であるとするれば、排出権取引もまた実施困難である。第3に、価格メカニズムの自動調整作用に信頼がおけないことから、廃棄物政策におけるリサイクルの義務づけといった一種の規制政策である拡大生産者責任政策が登場している。第4に、規制の効率性分析の手法としての費用便益分析を実際の有害物質規制に適用しようとするれば、往々にして規制の便益が費用を下回る結果となり、現実の

規制の大半を否定することになってしまう。これらのことを、実例を挙げながら論証した。

### 会計制度と市場の共進化—クリエイティブ・アカウンティングと会計制度の進化

京都大学 澤邊紀生

会計制度と金融市場は、相互を環境としながら進化してきた。各国の会計制度は、エンロン事件のような会計スキュンダルによってその欠陥が明らかにされることを通じて強化されてきた。会計不正は、会計士の仕事を増やし、会計基準設定主体の役割を増大させてきたのである。会計制度の歴史は、会計制度の不備を逆手にとった経済活動が会計制度を進化させてきたと解釈できる。

1980年代以降の英米におけるクリエイティブ・アカウンティングの問題は、会計基準の整備と会計不正の共進化過程を考えるうえで興味深い事例を提供している。クリエイティブ・アカウンティングとは、会計ルールの文言を守りつつ、その精神に反するような会計行為という意味であり、オフバランスシート・ファイナンス商品の開発がその代表例である。クリエイティブ・アカウンティングをめぐる、市場（金融商品開発者）は基準の裏をかこうとし、会計制度（会計基準設定主体）は基準の強化によって対応しようとし、まさにいたちごっこの様相を呈するようになった。いたちごっこの具体的な事例として、リース会計、証券化、子会社の事例が紹介された。

このような会計基準と金融商品の関係については、会計基準設定主体もピースミー

ル・アプローチの限界として認識していた。そこで金融商品について包括的な基準を設定しようという努力が行われてきているが、これが契機となって会計基準の基本的フレームワークさえもが転換をせまられている。さらに英国では、詳細かつ明確な会計基準（ルール・ベースト・アプローチ）の問題点が、明示的な基準ではループホール探しを回避することができないとして、非常にあいまいな「真実かつ公正なる概観」を中心として原則主義（プリンシプルズ・ベースト・アプローチ）に基づく会計制度の整備が進められている。会計制度と市場の共進化の過程で、相転移が生じたのである。

### 新しい「政策」概念—ベンチャー振興から考える

大阪市立大学 塩沢由典

経済政策を考えるにあたって、「政府」対「市場」という対立軸が立てられることが多い。しかし、経済問題は、「政府」対「市場」という2項対立のみで考えてよいものであろうか。温暖化ガスの排出抑制を考えてみよう。これは市場に任せておいてもうまくいかない。政府の直接介入が好ましいともいえない。そこで排出権市場の制度化が提唱されているが、もうひとつ「みなで気をつける」という方策もある。ここには、市場でも政府でもない、「公」の発現がある。まったく異なる事情においても同様のことがある。通常市場競争では、研究・開発に関する情報は秘匿されるが、ある地域がある技術で世界の他地域に先んずるためには、競争前段階の情報は公開されることが望ましい。

日本では、「政策」ということばは、一

般に「公共政策」＝「政府の施策」と理解されている。政策の担い手として中央・地方の政府のみが考えられているからであろう。「政策」を多くのひとびとが共通に追求する社会理念と捉えなおせば、政府に頼るのでない新しい可能性が見えてくる。

1990年代の不況に対して、日本では、政府の出動が求められた。結果として信用保証や不良債権償却のため何兆円もの財政措置が必要となった。アメリカ合衆国のSHAREやバングラデッシュのグラミンバンクでは、公共的理念を掲げる民間団体

が小事業の拡大を可能にする融資制度をつくりだしている。このような公共目標をもつ事業家たちが日本にも生まれてきている。片岡勝（社会起業家）、山中昌幸（起業家教育）、長谷川岳（よさこいソーラン祭主宰者）などである。政策遂行の担い手が政府職員から、NPOやコミュニティ・ビジネスの活動家に移りつつある。ベンチャー振興は、現在重要な政策課題となっているが、政府のできることは限られている。むしろが学会や大学が政策推進の主体となる可能性がある。

### 進化経済学会第III期第2回理事会

1. 進化経済学会第III期第2回理事会は、2003年11月1日の12時から13時半にかけて、福井県立大学福井キャンパスで開催された。出席者は、14理事、1監査委員、会長、副会長、その他1名であり、また議長委任が12理事からあった。

2. 入会申込と退会の状況の説明が八木副会長からあった。前理事会以降の退会通知は8名、今年度末での退会希望者は5名あった。また、3年間会費滞納による除籍の適用を調査する段階でさらに6名の退会希望が出たが、なお意思確認のできていない会員が12名いる。他方、入会希望者が12名あり、うち5名が大学院生である。

今理事会での退会確認者は14名、入会資格承認者は12名であるので、11月1日現在の会員数は552名（個人会員458、院生会員91、賛助会員1、招待会員2）である。意思確認のできていない会費滞納者につい

ては、次回理事会までに会費納入が無ければ会則第7条を適用する。

3. 2監査委員の署名が付された平成14年度決算書が配布され承認された。ただし、予算の会計内訳に誤記があったことが陳謝とともに報告された。また、国際文献内の事務局が作成した平成14年度の収支計算書と平成15年度の間接報告が示された。これについては、八木副会長から、決算書の作成後、昨年度大会費の追加支出があったため、繰越金額にズレが生じているという説明があった。それに対して、年度末の会計処理を慎重かつ適切におこなうこと、また、会計等の重要書類は最低限常任理事レベルでアクセス可能にするように配慮されたいという意見が述べられた。

4. 塩沢会長が澤邊紀生会員を総務・会計担当の事務局理事として任命し、理事会は

それを承認した。また、6月5日に開催された常任理事会で、学会事務を国際文献印刷社に委託することとし委託契約を会長名で締結したことが、契約の内容とともに示された。

5. 第8回福井大会の研究申込状況、企画内容が服部事務局理事（大会担当）から説明された。申込は35件、その他4件があり、ポスターセッションも申込が10件ある。企画セッションとしては、オータムコンファレンスの継続として「市場と政府の共進化」をたとえば福井県の経済をとりあげて論じるシンポジウムやポスターが考えられている。なお、海外からのゲストとしてオルボワ大学（デンマーク）のE.S.アンデルセン（アナーセン）教授が参加可能であると伝えられ、教授の講演の扱いを大会運営委員会に任せることとなった。

6. 英文誌創刊の進行状況が英文誌の編集委員会から説明された。Editorial Board が成立し、Instruction for Authors が作成されたこと、また創刊号の概要が固まったことなどについてである。[同日夕に拡大編集委員会がおこなわれ、Instruction と Referee Sheet の検討のほか、vol.1, no.1, no.2 の内容、vol.2 以

下の編集方針、会員論文の発掘、投稿奨励策について討議された。]

7. 進化経済学に関係する理論・学説・用語・事例を網羅するハンドブックを編集・刊行するという提案が塩沢会長からなされ、塩沢会長をチーフとして清水耕一、磯谷明徳の両理事が協力して編集委員会を組織して推進することになった。これは、学会の事業であるが、出版社側からアプローチがあった事業なので、可能な限り独立した商業出版としておこない学会から出版費を持出すことは避ける方針である。

8. 経済学会連合に加盟が承認され、6月5日の常任理事会で西山理事、有賀理事をその評議員に選定したことが報告された。また、10月21日の連合評議員会への西山理事の出席報告が配布された。

9. その他事項として、来年5月に京都で開催される WEHIA (Workshop on Economics and Heterogeneous Interacting Agents) の協賛団体として学会名称を用いることが承認された。（文責：八木）

退会者・入会資格承認者名簿（敬称略）

《退会》 佐々木晃、飯田経夫（物故）、岩本武和、村沢浩、中久保邦夫、砂田薫、大島真理夫、仁連孝昭、稲垣耕作、浜口恵俊、寺邊正大、吉川洋、今井賢一、竹田茂夫 以上14人

《入会資格承認者》

黒羽根貴之、中谷光博、伊藤宣広、郡司幸夫、砂川和範、水野勲、平野健、福島達臣、加藤淳一、妹尾裕彦、木村誠志、樋口浩義 以上12人

進化経済学会 平成14年度決算

(平成14年4月1日～平成15年3月31日)  
(単位:円)

収 入			支 出	
概 要	14年度予算額	14年度決算額	概 要	14年度予算額
前年度繰越	2,000,000	2,628,067	大会費	1,500,000
会費	5,510,000	4,420,000	通信費	650,000
(内訳)			進化経済学会	
正会員	5,020,000	4,025,000	出版費	1,500,000
(519名)			事務用品費	300,000
院生会員	385,000	345,000	交通費	600,000
(74名)			人件費	390,000
賛助団体	50,000	50,000	送金手数料	40,000
会員			会議費(理事	
(1団体)			会費等)	200,000
書籍売却代	0	76,500	講演会謝礼費	200,000
利	0	194	印刷費	200,000
			部会等補助費	250,000
			選挙費用(名簿作成費	
			含む)	200,000
			小 計	6,030,000
			平成15年度	
			への繰越金	1,480,000
総 計	7,510,000	7,124,761	総 計	7,510,000

上記の通り相違ないことを確認致しました。

平成15年 6月 10日

進化経済学会

監査委員

富森彦寛

谷口和彦

学会参加記

プシノでの進化経済学会議

京都大学 八木紀一郎

去る9月25-27日にモスクワ郊外のプシノで開かれた進化経済学の国際会議に、有賀裕二会員とともに参加した。これは、2002年春の Evolution & Transition 国際シンポジウムで来日し、関西大学(千里山)大会にも参加したウラディミール・マエフスキーが所長になっている進化経済学センターが主催した会議で既に5回目になるという。

モスクワのセンターからバスが出て、プシノに到着するのに2時間ぐらいかかったから、結構遠い。研究施設とその関係者のアパートが白樺林のなかにたちならぶ科学都市で、昔は一般人を立ち入らせなかったという。学会は同時通訳の設備のある会議場で行われたが、建物はやや古ぼけている。生物学の研究所では最初にクローンが作られたという説明があったが、それは純粋な科学的研究だったのだろうか。ホールの周囲の掲示類をみてまわると、化学兵器の安全な廃棄法などがある。かつての軍事国家からの離脱はやはり大変なようだ。

今回の会議は、「経済の形態変化とシュンペーターの進化的理論」という総題だった。学会の参加者は50人くらいで、ペーパーは20本と少しあった。ペーパーは英語で出ているが、ロシア人たちはロシア語でしゃべっている。外国からの参加者としては、ジェフ・ホジソンとジョバンニ・ドシが、それぞれ「経済学におけるダーウィ

ニズム：アナロジーから存在論へ」、「経済変化の解釈：進化・構造・ゲーム」という総論的な話しをした。ホジソンはD・デネットなどに影響されてダーウィニズムについての見方を変えたらしく、それを実在世界についての普遍的なメタ理論と解釈するようになっていた。ドシは進化経済学の基本的な思考法について概説したが、ロシア側からも主催者のマエフスキーはじめ概説的なペーパーが数本出た。ビッグネームとしては、体制転換前からの改革派エコノミストであったアバルキンが1日だけ参加して企業者精神について語ったが、もはや影響力はなさそうだった。元気だったのは、数理物理学者のチェルナフスキーで、探し求められている進化するシステムの理論は既に存在すると手を大きく振りあげながら力説した。多重になった階層構造のなかで自己組織化を考えたもののようだが、彼はそれをロシアの経済収縮にも応用している。

私はシュンペーターの社会進化のビジョンを探求するペーパーを提出したが、ほかにも数人がシュンペーターについて論じた。ロシアでのシュンペーターの翻訳者であるアヴトノーモフは、『経済発展論』の翻訳が1982年に出されたのは早すぎたが、1995年に『資本主義・社会主義・民主主義』の翻訳が出た時には、社会主義を批判するハイエクなどの影響の影に隠れてしまったとぼやいた。有賀会員は、異質なエージェント間の相互作用のもとでの複雑適応の過程を論じた。ロシア側からも、K・サドチェンコの経済構造のライフサイクル分析などの



数理分析があった。

ロシアの現実にかかわっては、「制度的  
トラップ」が存在するという V・ポルテロ  
ヴィッチの議論が共感をかちえたらしく、  
多くの発言者がその語を口にした。マエフ  
スキーとともに会議の総括にあたったホル  
スト・ハヌーシュ（国際シュンペーター学  
会）は、プシノのような都市で形成された  
水準の高い科学を産業と結びつける企業者  
精神と経営スキルがロシアでは必要とされ  
ているとした。

さて、日本ではどうなのだろう。

ヨーロッパの進化経済学と  
技術革新論：EAEPE 年次大会と  
SPRU コンファレンスに参加して

京都大学 徳丸宜徳

去る 11 月、EAEPE (European Association  
for Evolutionary Political Economy) 年次大会  
で報告することになり、南オランダの古い  
都市であるマーストリヒトを訪れた。  
EAEPE はいわばヨーロッパ版「進化経済学  
会」である。「日本から来た」と言うと、  
いまだに決まり文句のように「ずいぶん遠  
くから！」と仰天されるが、ロシアを含む  
欧州各地はもとより、アフリカ、アジア、  
オセアニアや北米、南米など、いわば世界  
中から研究者が参加して毎年大会が行われ  
ている。学会の中心人物の一人は、第 2 回  
東京大会で講演した G. Hodgson である。研  
究報告は 2 日間行われ、報告論文 165 本と  
いう大きな規模の大会であるから、網羅的  
にセッションを聴いて回るというわけには  
到底いかない。セッションも非常に多岐に  
わたり、ざっと挙げると「産業・企業・イ

ノベーション」(9), 「方法論」(6), 「知識・  
情報」(4), 「金融」(4), 「地域経済」(3),  
「移行経済」(3), 「制度の経済史」(2), 「ジ  
ェンダーと公正」(2), 「経済発展」(1), 「政  
府の役割」(1), 「環境」(1), 「マクロ経済」  
(1), 「経済学史」(1), 「文化と経済」(1),  
「EU とグローバル化」(1)といった具合で  
ある(括弧内はセッション数)。統一テー  
マは「情報化社会：その制度を学際的に理  
解する」であった。これは、主催者である  
マーストリヒト大学の MERIT (Maastricht  
Economic Research Institute on Innovation and  
Technology) が、ヨーロッパにおける技術革  
新研究の一拠点であることと関係している  
のかもしれない。

全体的な印象だが、概念そのものや概念  
間の連関をクリヤにすることくに力を  
注ぐ報告者が多いと感じた。それは、「方  
法論」や「知識・情報」といった conceptual  
work に的をしぼったセッションが多いこと  
からも明白だが、私が主に見て回った「産  
業・企業・イノベーション」に関するセッ  
ションでも、その傾向は顕著だった。この  
傾向について、知り合いになったある研究  
者は、「進化経済学が最先端に挑戦する限  
り、新しい概念を作ったり、それを練り直  
したりするのは当然だ」と評していた。確  
かに、なぜ「進化」概念を援用するのかと  
いった問題を含め、色々な概念を詰める余  
地はかなりあると思われたし、「理論」と  
「現実」をどう切り結ぶかとか、シミュレ  
ーションの位置づけといった、方法論に関  
する問題でも、クリヤにするべき問題が多  
いと思った。

また、異なるバックグラウンドを持つ研  
究者どうしの交流も、それなりにはかられ

ているという印象を持った。例えば、「産業・企業・イノベーション」のようなセッションでも、「モデルビルディング指向の研究者」「コンセプト構築・検討指向の研究者」「実証指向の研究者」という三者で、一つのセッションが組まれるという傾向があるようだ（昨年と比べ、今年は必ずしもそうではないケースが多かったが・・・）。この編成方法についてどう思うかと、シミュレーションをやっている別の研究者に尋ねてみると、「シミュレーションの題材や構成に関するインスピレーションが得られるから有益だ」という答えが返ってきた。確かに専門家どうしの交流は研究の根幹だから重要だけれども、多様なバックグラウンドを持つ研究者どうしを交流・交錯させる仕組みを作ることは、日本でも課題として一考に値するのではないかと思った。

翻って日本の「進化経済学会」は、実際にモデルを構成してシミュレーションすることで対象を理解するという「実行力」において、EAEPEよりもかなり先を行っていると思った。「コンセプトチュアル・ワーク指向のEAEPE」「モデル・インプリメンテーション指向のJAFEE」という違いが何に起因するのかは分からないが（これ自体は、経済学研究の「比較制度分析」として面白い問題だと思うが）、両者の違いは報告論文の構成からも明白である。もし、さらなる学問の進展にとってこの2つの指向が結びつくことが必要だとしたら、日本でコンセプトチュアル・ワークを行う場合の有利な点は、最先端のモデルビルディングの実際を身近に観察できたり、そのような研究者と議論できることではないかと思った。反面、EAEPEの場合は、そのような観察機会

が不足しているのではないかという印象を持った。

翌週にはブリテン島南岸のリゾート地であるブライトンに移り、技術革新研究の世界的拠点であるSPRU（サセックス大学科学政策研究ユニット）で開かれた、“What do we know about innovation?”というコンファレンスに参加した。それは、SPRUで長らく中心人物だったK. Pavittを追悼するコンファレンスで、日本でもよく知られたR. Nelson, S. Winter, G. Dosiといった人々も参加していた。

セッションでの報告内容以上に興味深かったのは企画に込められたアイデアだった。第1に、“Innovation debate”という全体セッションが3つあったので、どのようなものかと楽しみにしていたが、それは期待に添う内容だった。「大学の研究を応用オリエンティッドにすることによって、基礎研究の質は落ちるか?」「技術開発はグローバル化していると言えるか?」「企業組織はおおよそ技術によって規定されていると言えるか?」という3つの「お題」について、賛成・反対各々2人ずつが弁論を行い、フロアからの質疑を行うというスタイルであった。命題に対する結論はともかく、研究すべき論点が弁論者・フロアの両方から溢れ出るという感じで、エンターテイメント的な要素も含まれていながら、とても有益だった。

第2に面白かったのは、「年長研究者によるポスターセッション」という企画である。主催者が説明したとおり、通常若手研究者がやるものというポスターセッションの常識を破る企画で、年長の研究者が自分の研究（ないし研究計画）を若手研究者た

ちにオープンにし、バックグラウンドを議論しようという狙いで企画されたそう。実際、S. Metcalfe や R. Nelson といった研究者たち15人ほどがポスターを展示しており、非常に盛況だった。私が面白いと思ったのは、米国の技術革新研究者である D. Mowery のポスターで、「80年代米国の特許強化政策が大学からの技術移転を促した」という通説を否定する実証研究だった。大学からの「技術移転」というのは、日本で通俗的に考えられているよりもはるかに複雑なメカニズムを持っているようだと感じた。また、茶目っ気を感じたのは、マクロの成長格差に関する研究で有名な B. Verspagen のポスターで、亡くなった Pavitt を中心とする技術革新研究者の人的紐帯を、

アンケート調査による資料をもとにしたネットワーク分析によって描写したものだった。

「こういう2つの試みは、欧米の学会でしばしばなされるのか」と、何人かの人に尋ねてみたが、とても珍しいという答えだった。個人的に話をした範囲でも、参加者には大変好評だったようである。EAEPEでもSPRUでもしばしば、「学会は楽しかったか?」「楽しかった!」という会話に出会った。エンターテイメント性まで求められては学会主催者も大変だろうと思うが、それが参加者の関心を活性化することもまた確かだと思った。(とくまるのりお:京都大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

### 関連学会・研究会案内

#### WEHIA04:

*The 9th Workshop on Economics with Heterogeneous Interacting Agents*  
(May 27-29, 2004 at Kyoto University)

中央大学 有賀祐二

「経済および経済学」は近年、経済学の外側の領域から研究対象として人気があり、もはや経済学者の占有するところではありません。古くは社会工学、近年では金融工学・経済物理が大変有名になりました。日本でも経済を研究対象として経済学以外の領域で学位がどんどん発行されています。学位などの制度化による経済学の学際化は新しい現象とはいえ、経済学を取り囲む「活発な学際的な交流」はけっして目新しいことではありません。「主流派経済学」は実

は1920-30年代の学際交流の活発な所産として誕生したものです。この時代に数学者のフォンノイマン、統計力学のワルトなど一流の科学者が主流派経済学の主たる公理に貢献しました。

一方、1980年代の進化経済学の誕生、非線形科学科学の興隆に端を発する複雑系経済学の誕生はすでに記憶に新しいところです。1987年、サンタフェではノーベル賞受賞者たちを含む著名な物理学者と経済学者の合同会議が開催されましたが、物理学者はアーサーの収益逡増経済学が物性物理の研究と同様のアイデアであることを認識します。これが縁でブライアン・アーサーを招聘してサンタフェ研究所経済部門が設立され、サンタフェ複雑系経済学は収益逡増、経路依存性とロックインなどのキーワ

ードを生み出しました。実際、前世紀には、収益逡増により経済システムは複雑な階層構造を急速に創り上げ、市場も様々な取引の場でニッチ化されていきました。

さて、このような急速な経済システムの変化の最中であって、経済学でもっと根本的な問題が提出されました。「マーシャルの代表的エージェントの方法」にたいする再検討です。代表的経済主体の経済学にはエージェント間の相互作用の観点が欠落しています。しかし、市場過程で「エージェントの異質性」を見出すことは決して難しくありません。短期の利益目当てのエージェントと長期に存続しようとするエージェントの戦略は当然異なります。強気と弱気のエージェントももちろん異質的です。

このように、経済のエージェントにかんして「博物学のような整理」を行うことができます。博物学的な整理はミクロ状態の記述に「分割ベクトル partition vector」のような分析手法を必要とします。これによって、経済をミクロ的に完全記述するという形式主義を拒絶し、マクロ的ミクロ経済状態をいかに記述し、統計力学的に分析するかを議論することができます。青木正直は1990年代に統計力学的な経済モデルの基礎を体系的に与えたパイオニアです。いま専門分野の違いを越えてこれに賛同する多くの人々が世界の各地から集い、このような観点からマクロ経済学が再検討され始めています。さらに、このようにして開拓される経済の確率過程モデルがどのような力学モデルに対応づけられるかなども、エージェントの相互作用研究の重要課題の一つです。

1920年代、ケンブリッジ経済学の主要論

題は「代表的経済主体」と「収益逡増」でした。経済学者としてこの流れを眺めると、実に、現在の議論は、マーシャル経済学とその批判者たちのケンブリッジ経済学論争の再来とも言えます。

WEHIA は Workshop on Economics with Heterogeneous Interacting Agents の略称で、異質的エージェントの相互作用を研究する経済学ワークショップです。経済学者はもとより物理学者、統計学者、マルチエージェントモデルを研究するコンピュータサイエンティストなどが参集している学融合的な研究団体です。これまで開催回数は8回を数えますが、すべてヨーロッパで開催されてきました。ちなみに2003年5月はドイツのキール、2003年5月はイタリアのトリエステでの開催でした。WEHIAでの報告数は1大会で100報告数近くあり、完成度の高いペーパーが多く、WEHIAはワークショップというにはもはやふさわしくないともいえます。詳しくは、WEHIA02 in KielのURLをご覧ください。

<http://www.bwl.unikiel.de/vwlinstitute/gwrp/wehia/home.htm>

このたび、2002年トリエステ大会で生天目章教授(防衛大)がWEHIAの日本開催を申し出て全会一致で京都開催が決定されました。これによって、WEHIAははじめてヨーロッパの外に出ることになったのです。こうして、WEHIAが2004年5月27-29日に京都大学で開催されることになりました。今大会は、進化経済学会副会長・八木紀一郎教授(京大)をvice-generatorとして、進化経済学会が後援しています。また青木正直教授(UCLA・中央大学)をhonorary chairと

して開催することも重要な意義があります。いろいろな意味で、記念的な大会となることを祈念する次第です。

以下は WEHIA04 in Kyoto の大会案内 (抜粋) です。

---

**9th WORKSHOP ON  
ECONOMICS AND HETEROGENEOUS  
INTERACTING AGENTS (WEHIA04)**

in conjunction with HAYASHIBARA FORUM  
ON EXPERIMENTAL ECONOMICS

website: <http://www.nda.ac.jp/cs/AI/wehia04>

The workshop will be a venue for presentation of the latest results of a wide variety of research that views the economy as a complex system of many, heterogeneous interacting agents. Research from various related domains, statistical mechanics, thermodynamics, learning, the theory of self-organizing systems can all be helpful in developing more satisfactory approaches to macro-econometrics and macro-economic theory.

**Workshop topics include:**

- Artificial markets with heterogeneous agents
- Multi-agents in Economics
- Experimental Economics
- Econophysics
- Financial markets with heterogeneous agents
- Non-linear Economic Dynamics
- Interacting Particle Systems in Economics
- Markets as Complex Adaptive Systems
- Agent-based models: Theory and Simulations
- Collective Decisions

Game theory, Evolutionary Games  
Market Mechanisms in Distributed  
Computing Systems  
Social and Complex Networks

**Keynote speakers**

- (1) Didier Sornette, U.C.L.A, U.S.A
- (2) Eric Bonabeau, IcoSystems, U.S.A
- (3) Thomas Lux, University of Kiel, Germany
- (4) Hediki Takayasu, Sony-CSL, Japan

**CALL FOR PAPERS**

The Program Committee invites the submission of contributions for oral or poster presentation. Persons interested are encouraged to send manuscripts no later than January 31, 2004. We prefer submission in PDF, PostScript or MS Word format which should be send to: [hsato@nda.ac.jp](mailto:hsato@nda.ac.jp)

Acceptance of a contribution for oral or poster presentation will be notified by March 14th, 2004.

The final version of the accepted papers is required by April 20 in order to include the proceedings. We plan to publish the selected papers from Springer after the workshop. Some selected papers are also publishes in the special issue of Evolutionary and Institutional Economics Review.

**The registration fee:** The registration fee is 10,000 Japanese Yen (about 70 Euro or 80 US\$). All participants will be required to provide for their own expenses.

**Financial aid:**

The financial supports are granted from Hayashibara Group and Kozo Keikaku Engineering Inc.

We have two types of financial support:

- (1) The travel fees are granted to some participants as the competitive base.
- (2) The registration fees are granted for attendants from oversea.

**Accommodation:**

The accommodations opportunities on campus and hotels at the downtown of Kyoto will be provided.

**For further information:** please contact us by email to: hmatsui@econ.kyoto-u.ac.jp or hsato@nda.ac.jp

**Honorary Chair:**

Masanao Aoki, University of California, Los Angeles <aoki@econ.ucla.edu>

**General Chair:**

Akira Namatame, National Defense Academy, Japan <nama@nda.ac.jp>

**Vice General Chairs:**

Kiichiro Yagi, Kyoto University, Japan <yagi@econ.kyoto-u.ac.jp>

Fumihiko Goto, Kyoto Sangyou University, Japan <gotof@cc.kyoto-su.ac.jp>

**Program Committee:**

Yuji Aruka, Chuo University, Japan

Shu-Heng Chen, National Chengchi University, Taiwan

Robin Cowan, University of Maastricht, Netherlands

Mauro Gallegati, Catholic University of Milan, Italy

Goyal Sanjeev, University of Essex, UK,

Neil Johnson, Oxford University, UK

Taisei Kaizoji, International Christian University, Japan

Alan Kirman, University of Marseille, France

Sheri Markose, University of Essex, UK,

Matteo Marsili, Abdus Salam Center, Italy

Sobei Oda, Kyoto Sangyou University, Japan,

Frank Schweitzer, AIS, Germany,

Kazuo Yoshida, Kyoto University, Japan

**Local organizers:**

Hiroyuki Matsui, Kyoto University  
<hmatsui@econ.kyoto-u.ac.jp>

Hiroshi Sato, National Defense Academy  
<hsato@nda.ac.jp>

=====

Akira Namatame,

Department Chair and Professor

Dept. of Computer Science,

National Defense Academy

1-10-20, Hashirimizu, Yokosuka, 239-8686, Japan

Tel. +81-46-841-3810 (Ext 2432)

Fax. +81-46-844-5911

e-mail: nama@nda.ac.jp

=====

## 進化経済学会 第8回(福井)大会プログラム

平成16年3月27日(土) - 28日(日)

テーマ 「市場と政府の共進化」

### プログラム セッション一覧

2004年3月27日(土)

	第1会場 (L112)	第2会場 (L113)	第3会場 (L209)	第4会場 (L210)	ポスターセッ ション会場
9:00-9:20	受付(共通講義棟1階 L108前)				
9:30- 11:30	地域経済	信頼・規範・ 慣習の形成論	進化と制度 (I) (10:10- 11:30)	チュートリア ルセッション (10:20- 11:20)	設営 (L114, L115, アトリウム)
11:40- 12:40	昼食		ポスターセッション 1分間スピーチ(L110) (11:40-12:00)		
12:40- 14:40	市場と政府の 共進化	進化の思想	進化と制度 (II)	進化ゲームと シミュレーシ ョン	ポスターセッ ション
15:00- 18:00	シンポジウム 福井県の経済(L108)				
18:30- 20:00	懇親会(多目的ホール 交流センター3階)				

2004年3月28日(日)

9:00-9:20	受付(共通講義棟1階 L108前)				
9:30- 11:30	技術革新	行動・知識・ 市場	資本蓄積と金 融	マルチエー ジェントベー スのアプロー チ (I)	ポスターセッ ション
11:30- 12:30	総会(L108)				
12:30- 13:20	昼食				
13:20- 14:10	会長講演(L108)				
14:20- 15:10	招待講演(L108)				
15:20- 16:50	シンポジウム 技術革新		デモセッショ ン U-mart (E104)	マルチエー ジェントベー スのアプロー チ (II) (15:20- 16:40)	ポスターセッ ション (16:30まで)
17:00	閉会の辞(アトリウム)				

報告時間 25分                      コメント・質疑応答 15分 (一部セッションを除く)  
休憩室 L110, L208              理事会会議室 L211

口頭報告プログラム

3月27日(土)

午前セッション (9:30-11:30)

地域経済 (L112) 司会 山田鋭夫 (名古屋大)

加藤健太郎 (福井県立大大・院) 討論者 正木響 (釧路公立大)

中国農村の工業化パターンの変容

野崎道哉 (岩手県立大) 討論者 谷口和久 (近畿大)

岩手県における民間企業資本ストックの計測

松尾昌宏 (桜美林大) 討論者 河野善文 (道都大)

産業集積と経済発展の自己強化メカニズム — 中国・ASEAN間の輸出競合と、産業特価パターンの分岐

信頼・規範・慣習の形成論 (L113) 司会 植村博恭 (横浜国立大)

渡部幹 (京都大・院)・仲間大輔 (北海道大・院) 討論者 清水和己 (早稲田大)

個々人の予想が制度に及ぼす影響——模擬市場を用いた集団実験研究

逸見彰彦 (㈱マーケティング総合設計研究所) 討論者 吉田和男 (京都大学)

超価値連鎖社会経済モデルにおける Ethical endowment driver による Convexity Model

土田 和長 (富士大) 討論者 若森章孝 (関西大)

チューネンの資本起源論 — 『孤立国』第2部第1編第8章「労働による資本の形成」ノート

進化と制度 (I) (L209) 司会 宇仁宏幸 (京都大)

中西康信 (福井県立大・院) 討論者 寺尾健 (甲南大)

垂直的統合と(長期)継続的契約との理論的差異

水口雅夫 (九州産業大) 討論者 萩本眞一郎 (東京国際大)

経済の制度進化と組織過程

チュートリアルセッション (L210) 司会 服部茂幸 (福井県立大)

江頭進 (小樽商科大)

進化経済学のすすめ



午後セッション (12:40-14:40)

市場と政府の共進化 (L113) 司会 富森虔児

大室悦賀 (一橋大・院) 討論者 井上泰夫 (名古屋市立大)

ソーシャル・イノベーションの社会経済分析 — 社会的企業を事例として

福島達臣 (中央大) 討論者 Luis Alberto Di Martino (羽衣国際大)

複雑系からみた政策 — ネットワーク型政治システムの可能性

Luis Alberto Di Martino (羽衣国際大) 討論者 福留和彦 (奈良産業大)

イタリア北東部における産地地区の国際化のガバナンス

進化の思想 (L113) 司会 鍋島直樹 (富山大)

木村雄一 (京都大・院) 討論者 広瀬弘毅 (福井県立大)

初期カルドアと企業理論 — エヴォルューションナリー・エコノミクスの視点から

山本泰三 (京都大・院) 討論者 岡村東洋光 (九州産業大)

トニー・ローソンの批判的実在論の検討

山本英司 (龍谷大・非) 討論者 平野嘉孝 (富山県立大)

カレツキと階級闘争

進化と制度 (Ⅱ) (L209) 司会 清水耕一 (岡山大)

江口友朗 (名古屋大・院) 討論者 中原隆幸 (四天王寺国際仏教大)

制度経済学における「制度—経済主体」論とその理論的展望 — 諸経済主体の相互作用の観点から

八木紀一郎 (京都大) 討論者 中村健吾 (大阪市立大)

社会民主主義と市場経済 — 戦後日本の場合

萩本眞一郎 (東京国際大) 討論者 八木紀一郎 (京都大)

維新直後における制度変化と組織能力の進化

進化ゲームとシミュレーション (L210) 司会 浅田統一郎 (中央大)

李皓 (京都大・院)・出口弘 (東京工業大学)

討論者 富沢拓史 (産業技術総合研究所)

ハイテク産業の二国間技術競争における政府政策の有効性 — マルチエージェントシミュレーションによる分析

香村由紀 (アネルバ(株)) 討論者 有賀裕二 (中央大)

価格固有値, 縮退価格, 無価格, 2重価格

シンポジウム (15:00-18:00)

福井県の産業の現状と未来 (L108)

坂本光司 (福井県立大学) ・小川雅人 (福井県立大学) ・南保勝 (福井県立大学助) ・  
杉山友城 (福井県立大学)

口頭報告プログラム

3月28日 (日)

午前セッション (9:30-11:30)

技術革新 (L113) 司会 依田高典 (京都大)

中川博満 (神戸大・院) 討論者 新田光重 (城西大)

特許が企業パフォーマンスに与える影響についての実証分析

泉宏明 (NEC 広島) 討論者 萩原泰治 (神戸大)

費用関数から見た技術革新と経済社会の変化 — プロセスイノベーションとプロダ  
クトイノベーションの発生過程の解明

徳丸宜徳 (京都大・院) 討論者 泉宏明 (NEC 広島)

技術の複雑性と組織の多様性 — 1990年代日米半導体産業における技術開発組織の確  
信とその多様性の持続

行動・知識・市場 (L113) 司会 西部忠 (北海道大)

須田文明 (農林水産省農林水産政策研究所)

討論者 逸見彰彦 (㈱マーケティング総合設計研究所)

知識を通じた市場の構築と信頼 — コンヴァンション経済学及びアクターネットワー  
ク理論の展開から

山本崇広 (東京大・院) 討論者 柴山桂太 (滋賀大)

市場秩序と解釈について — 解釈学的経済学についてのノート

石井吉文 (ニッセイアセットマネジメント, 東京大・院) 討論者 森岡真史 (立命館大)

価格変動のリスク認知と資産リスクプレミアム — プロスペクト理論からのアプロー  
チ

資本蓄積と金融 (L209) 司会 青木達彦 (信州大)

北野正一 (神戸商科大) ・神戸基好 (神戸商科大・院) 討論者 野崎道哉 (岩手県立大)

進化的な資本蓄積過程のいくつかの問題

馬場真一郎 (京都大・院) 討論者 深瀬澄 (大阪経済法科大)

証券市場における情報の非対称性の性質

高倉泰夫 (長崎大) 討論者 新宮晋 (福井県立大)

拡大再生産表式での蓄積基金の形成と支出と信用制度の導入

**マルチエージェントベースのアプローチ (I) (L210) 司会 喜多一 (京都大学)**

佐藤尚 (JAIST) 討論者 江頭進 (小樽商科大)

内部ダイナミクスを持つエージェントとマイクロ・マクロループによる動的社会シミュレーション

小山友介 (東京工業大) 討論者 中島義裕 (大阪市立大)

UMIE2003 と U-Mart2003 の報告

小山友介 (東京工業大) ・石西正幸 (東京工業大) ・喜多一 (東京工業大) ・

出口弘 (東京工業大) 討論者 小野功 (徳島大)

市場指向プログラミング技術を用いた先渡市場の構築 — 制度比較

**会長講演 (L108) (13:20-14:20)**

塩沢由典 (大阪市立大) 21世紀における進化経済学 — ひとつのマニフェスト

**招待講演 (L108) (14:20-15:10)**

Esben S. Andersen (Aalborg University) Schumpeter and Evolutionary Econometrics

**午後セッション (15:20-16:50)**

**シンポジウム 技術革新 (L112)**

**デモセッション U-mart (E104) 司会 松井啓之 (京都大)**

中島義裕 (大阪市立大) 説明

小野功 (徳島大) ゲーム

石山洗 (中央大) ・出口弘 (東京工業大)

デフリーディング&ログ解析 (デフリーディングの解説)

**マルチエージェントベースのアプローチ (II) (L210) 司会 吉田雅明 (専修大)**

中山晶一郎 (金沢大) 討論者 在間敬子 (専修大)

カフェ選択問題におけるエージェントの習慣形成

在間敬子 (専修大) 討論者 岡敏弘 (福井県立大)

環境配慮の普及に関するエージェントベースモデル分析 — エージェントの行動変容と社会の価値観の変容

**ポスターセッション (L114, L115, アトリウム)**

小野功 (徳島大) 新サーバーの紹介

喜多一 (京都大) サマースクールの報告

橋本文彦 (大阪市立大) 時系列データに対するマルチモーダル情報処理

北澤裕子 (奈良女子大・院) ・橋本文彦 (大阪市立大)

時系列データ予測に対する学習の効果

上田智巳 (大阪市立大・院) ・橋本文彦 (大阪市立大)

逐次更新される時系列的数値情報に対する人間の情報処理行動

岡本格治 (大阪市立大) ・中島義裕 (大阪市立大) 内集団ひいきはなぜ起こるのか?

深瀬澄 (大阪経済法科大) ・森本紘文 (大阪経済法科大・学部生)

日本の株式市場における投資主体別行動と株価変動

瀬尾崇 (京都大・院) ミクロ的競争とマクロ的競争の連関 — 置塩競争モデルを超えて

青木博明 (阪南大) Excel VBAによるゲーム理論の計算ツールの製作の試み

村上雅俊 (関西大・院) ・谷田則幸 (関西大)

貧困・格差問題の人工社会モデルによる分析の試み

吉野裕介 (京都大・院) F.A. ハイエクにおけるルールの進化論について

高橋真悟 (京都大・院) J. R. コモンズの進化思想 — 法の適正過程における制度進化  
(番外) 服部茂幸 (福井県立大) (協力 服部ゼミ) 福井県の経済と社会

## 大学へのアクセス

福井駅より

1. バス 福井駅前バス停 (11番乗り場) - 県立大学 約30分
2. えちぜん鉄道 福井駅-松岡駅 約20分  
松岡駅到着後タクシーに乗る 約5分  
(松岡タクシー 0776-61-0580)
3. タクシー 福井駅 (東口) から約30分 3000円程度

バスとえちぜん鉄道の時刻表

	バス		えちぜん鉄道	
	福井駅前発	県立大学発	福井駅発	松岡駅発
7	50	18	27	39, 59
8	12, 20	53,	00, 30	29, 59
9	20	03	00, 30	29, 59
10	20	03	00, 30	29, 59
11	20	03	00, 30	29, 59
12	12, 20	03, 53	00, 30	29, 59
13	20	03	00, 30	29, 59
14	20	03	00, 30	29, 59
15	20	03	00, 30	29, 59
16	12	03, 53	00, 30	29, 59
17	00, 52	43	00, 30	29, 59
18	00	43	00, 30	29, 59
19			00, 30	29, 59

小松空港より バス 福井駅行き 丸岡インター下車 タクシー 約5分

車 福井北インター下車 左に曲がる 後は表示に従う (大学に駐車場は完備)

詳しくは 福井県立大学ホームページ 福井県立大学への交通アクセス、時刻表  
<http://www.fpu.ac.jp/intro/traffic-j.html>

**宿泊施設** 学会割引, 福井県立大学割引の料金です。各自で予約してください。

**ユアーズホテル福井** TEL (0776)-25-3200 FAX (0776)-25-3549

シングル 7000円 (朝食なし), 8000円 (朝食なし)

**ニューユアーズホテル福井** TEL (0776)-24-3200 FAX (0776)-24-3541

シングル 6000円 (朝食なし), 7000円 (朝食なし)

以上の2つは進化経済学会の名前を知らせてください。

**福井ワシントンホテル** TEL (0776)-27-8811 FAX (0776)-27-8800

シングル 6900円 (朝食なし), 7600円 (朝食あり)

(日曜日の夜はさらに500円割引)

福井県立大学の名前を知らせてください。

**大学の近くのレストランなど**

くら (ラーメン屋), サニーサイド (イタリア料理)

やまむら亭 (和風フランス料理), 北斎 (和食) (この2つは徒歩10分ぐらい)

大学付近に食事をするとところが少ないので, 弁当 (1000円) を注文されることをお勧めします。

**懇親会** 4000円

終了後はバスが動いていません。福井駅付近で宿泊される方にはチャーターバスを出しますので, これに分乗してください。

**第8回進化経済学会福井 (福井県立大) 大会運営委員会**

委員長・岡敏弘 (福井県立大学経済・経営学研究科: [oka@fpu.ac.jp](mailto:oka@fpu.ac.jp))

事務局長・服部茂幸 (福井県立大学経済学部: [hattori@fpu.ac.jp](mailto:hattori@fpu.ac.jp))

運営委員・新宮晋 (福井県立大学経済学部)

運営委員・広瀬弘毅 (福井県立大学経済学部)

大会事務局から：

<<大会出欠について>>

福井大会への出欠について、同封の返信用はがきに記入のうえ、  
3月15日（月）必着でお返事いただきますようお願いいたします。

学会事務局から：

<<英文誌の創刊案内について>>

英文誌の創刊案内が同封されるので、投稿と大学などでの予約の  
働きかけをお願いします

【編集後記】

このニューズレターより編集を担当することになりました。慣れないうえに段取りが悪く、  
発行がずれこんでしまいみなさまにご迷惑をおかけしたことお詫び申し上げます。ニューズレタ  
ーについてのご意見をお待ちしております。